

冠省

それまでの北向きから南向きへ転室になったのが、三ヶ月遡るところの6月23日。その途端「猛暑日」が始まり、先が思いやられると言っていました。

そこへきて、右下腹に鈍痛を覚え鼠径ヘルニアの診断、手術の段取りになるということでした。大阪の医療センターへの移動に向けスタンバイしていたところ

「8月30日（水）朝一番で大阪へ移監となりました。9月いっぱいでもた徳島に戻ることになると思われます」との手紙を先日受け取りました。

2017年にやはり左鼠径ヘルニアの手術を受けているので余裕もあり、むしろ個室で読書三昧かと期待する様子も窺われました。

手術が首尾良く終わり元気になって、秋風の吹く徳島へ帰ってこられますよう願っています。

2023年 9月 15日 島津カヨ

779-3133 徳島市入田町大久200-1 和光晴生

(1/2)

<近況報告> 2023年9月

和光晴生

猛暑と台風とに翻弄される夏とがていす。堺の外の奥社会は電気代や諸物価の高騰で、さぞ大変な日々がたてうことと思います。徳島刑務所では、お盆休みが8/11(金)から8/16までの六連休とがて、その間、私は扇風器だけが頼りの単独室(旧称独居房)に蟄居状態となりました。

数月前から右下腹に鈍痛を覚えるようになり、しりもふくみ始めたので、7/13に医務科で診察を受けたところ「鏡径ヘルニア

です。手術をしなければ治りません。手術の段取りをします」と告げられました。私は2019年12月にも左下腹の鏡径ヘルニアの

手術を、堺市の大阪医療刑務所で受け、一か月ほど一人用の病室で過ごしました。今年も同様になるのでしょうか。お盆休み明けから、いつ移送とがててもいいように、スタバイしてなければなりません。治療経費は全て、官費で賄われます。往復の移動と手術代と入院費用とで、前回も今回も百万円ほどはかかっているものと思われす。私は2015年12月には、右目の白内障の手術を徳島市内の眼科医で受け、手術前後都合6回、護送車を通いました。この時にも、かなりの経費が官費で支払われています。

ヘルニアと白内障は命にかかるとは別れました。これが癌や心臓病などとがると大変です。私と同じ工場にいた人が二人、肝臓癌で大阪医刑に送られ、帰らぬ人となりました。

(2/2)

1971年11月、渋谷での沖縄戦争で機動隊員が火炎ビンで焼死した

件の実行犯として、徳島刑で無期懲役に服していた星野さんは

肝臓癌が末期段階にかかっていた。東京の成人矯正医療センターに

送られ、強行エビ病巣摘出手術後急死した。日本赤軍の

丸岡修さんは、八王子医療刑務所で、心臓病が悪化し、必要の

手術が受けられなかった。苦しみ、悶死に到りました。「よど号

クルーズ」の田中義三さんは、タイから強制送還された後、

熊本刑で服役中、肝臓癌が悪化し、大阪医刑に送られた

のですが、もう手遅れという事で、民間病院に移され、家族に

看取られて亡くなりました。無期懲役刑で服役中の公安事犯

の方々の中にも、長期の服役で、病状が重篤化しているケースが

示えています。1979年、山谷マニエス交番の警官を刺殺した件で、

旭川刑に服役中の石幾江さん(獄中44年)、「東アジア反日武装

戦線」の黒川さんは宮城刑で、仮出所に向けた審査である仮面接

と本面接まで受けたのに、「不可」との決定を下された。(獄中48年)。

千葉刑で服役中の「連合赤軍浅田山荘組」の吉野さんは、身柄

引受人や、出所後の生活条件等、すべて整っていない。(獄中51年)。

私は1997年に

「バノン・バレット」で拘束されて以来、獄中26年になります上記の

皆さんと同様「物無期」(実質終身刑)なので、出来る限り、長生き

して刑務所に居残り続け、健康寿命をひきのばして、しっかり

(3/12)

「終活＝終括」を果しぬます。私は昨年、<近況報告>で日本赤軍と新左翼の斗いのとらえ返に提起してきました。今回は

「全共斗運動についての私見を述べます」 1960年代半ば以降、

全国的に高揚した全共斗運動の全体像をとらえ返す
嘗為の一つとして、1994年と2020年と、「全共斗自書」と

「続全共斗自書」とか刊行され、更には「全共斗未完の総括」という副読本まで出ました。かつての活動家5千名もの方々に

七十項目からなるアンケートを送付し、回答として寄せられた五百通を
その際採録するという労作だったのです。全共斗運動と党派

との関わりについては検証が不徹底であったように、その反省から、

その後、「全共斗個人史プロジェクト」という、かつての活動家の方々と
直接の面談、インタビューによる検証作業が進められていす。

この企画をめぐり、「共産同赤軍派の専従活動家を経て、

日本赤軍の司令部と下の方から「続自書では、党派に関わる
設問がなからず、全共斗運動は党派抜きに全国的に高揚

したから、これは事実である」となどと事実経過とはまったく真逆と
なる見解を寄せています。当時の実情としては、各学園の全共斗運

動の現場に介入し、活動家をリクルートする草刈り場としての党派
でした。その具体例として、赤軍派はアトからの分裂後、「全国長征」と称

する活動家のリクルート一本釣りを展開して 私の下宿にも二人連れの
オルグの人が来たのです。あいにく私の下宿は日吉キャンパスのすぐ

(4/12)

近くにあることから、いつも級友や活動家仲間が出入りして、一本釣り

どころではなく、早々に引きあげてしまったのでした。**この頃の「全国長征」で赤軍派が呼び集められていたのは、多くが地方の大学生や都会の高校生たちで、その結果、各大学、高校での全共闘運動が弱められてしまっていたはずなのです。**

赤軍派の首相官邸占拠作戦むけの軍事訓練が大菩薩峠の山小屋で行われた時に、急襲した機動隊にほぼ全員の53名が逮捕され、その中には地方からの大学や高校の活動家学生が多数含まれていました。公安警察の取り調べで自供調書を取られた人が相当数のぼり、それを知った獄中の塩見さんは「党の軍化・軍の党化・共産主義化が必要だ」と言い出し、この「共産主義化」という言葉が、その後、連合赤軍の山岳ベースで、森垣大指導部により、メンバーの暴力による「総括要求」の理論づけに利用されていったということもあったのです。

党派の専従活動家であつた方々には、自分(たち)の必要^ニ事のためには、平気で他者を利用するという習性を身につけておいてくれたようでした。全共闘運動は個別の

学園での、学費値上げ、学生会館運営権、不当処分、大学当局による不正等に対する闘いとして開始されていく。それらへの闘争方針を持たず、権力奪取に向けて、下年政治決戦に動員するは全共闘への闘わり方を持てたにいたったのが、党派でした。東大闘争では安田講堂に、党派が競いあって自派の旗を掲げていました。69年9.5の日比谷野音における「全国全共闘結成大会」は、八派共闘によって行われたとされています。

(5/12)

そのように党派のあり方を正当化することに使われていたのか。V-2の「職業革命家の党」「中央集権型の単一前衛党」という組織論で述べた。V-2は職業革命家の年齢の「自然的境界」を35歳と規定していた。「職業革気取りの二十代の学生活動家が党派の「専従」となった。」「食容」として扱います。『神津陽未刊行論考集』(2020年JCA出版刊)によると、中央大全共闘「全中闘」は、党派の介入を寄せつけず、1966年から68年にかけて、学館運営権、処分撤回、学費値上げ阻止の闘争で、大学当局から全面的な勝利をかちとっていました。これは全国でも稀有な例とされています。それだけ活動家たちの結束が固く、学生大衆の広範囲な参加もあったということでしょう。神津さんは、その闘いの中で得られた「共同体験」「共同性」こそ、全共闘運動が、社会革命へと発展していく鍵となる成果であると高く評価し、常働運動においても、値上げとわりのモノ取り闘争の成果より、その闘いの中で得られる共同体験、共同性こそが価値あることであると述べています。

これと同じ見解が、「権力を取りつて世界を変える」という本にもありました。(同時代社、2009年刊) 著者のジョシ・ホロウェイは

マインランド出身で、ソフトウェアのエンジニアで卒業後、同大の教授となり、その後、メキシコ、プエブラ自治大教授となっています。彼はメキシコ先住民によるサポテイト運動のインテログであり、世界社会フォーラムの中心論客でもなっています。彼は、この著書で、エンゲルス由来の史的唯物

(6/2)

論や科学的社会主義に対し批判を加え、更ニ、V-I-Iの前
衛党理論は、そのエンゲルスの理論から導き出されたもので
あるとして、党による労働者の「外部注入論」や権力の獲得
を革命の担子とする考え方を否定していき。[ホロウエイは「社会
革命」という言葉を使っているが、彼の論点は、神津氏の
主張とほぼ重なり合っている。] [ホロウエイは、サントス達から
メキシコ政府から広汎な自治権を獲得した勝利体験を共有
することから、「闘争に参加した人々にとってそれは重要な成果は
闘争の共同の輪が發展することなのだ」、「反権力は私たちが日常
的に形づくっている尊厳という関係——愛・友情・仲間の結びつき
コミュニティ・協同一のなかにある」と、やはり共同体験・共同
体思想を世界を変える運動の鍵としていき。私が未決で、
東京拘置所に収容された頃に出た 小熊英二著「1968年」と
いう本では、全共闘運動を、「高度成長によって引き起こされた現代的
不幸——アイデンティの不安・未来への閉塞感・生の実感の欠落——に対する
集団的摩擦反応であり、集団的自分探しだった」といなどい。およそ
研究者や評論家以前の野次馬的感想が書かれていた。

全共闘運動の現場には、バリケードストラテジーにより解放空間
となったキャンパスに祝祭ムードが溢れている。各人が、

解放区の構成主体となることで得られる高揚感です。その
共同体験が学園や労働戦線にとどまらず、地域、社会
へと広がっていき、^{そこ}更には社会が国家を包み込み、無^く
していく「社会革命」に繋がります。党派の闘いや全共闘

の運動が高揚の背景には、二つの要因がありました。

一つは、1965年11月から1970年7月まで続く「いざなぎ景気」
と呼ばれる好況です。もう一つは、「団塊世代」と呼ばれる
戦後のベビーブーマーたちが二十歳前後の年齢に達し、体制に
対し異議申し立てと政治的・社会的な運動の主力
となっていた、という人口動態上の要因です。この当時は、都市
が拡大し、サブカルチャーが開花し、社会全般に活気と活力が
満ち溢れています。「60年安保」当時には、1958年7月から61年
12月まで続く「岩戸景気」と呼ばれる好況もありました。
この二つの好況期のGDPの年間成長率は11%を超えています。

日本のベビーブームは1947年から1949年までの3年間で終わらな
い。人口急増で、住宅、教育等に予算がとられ、戦後復興を
遅らせることを恐れ、政府が「優生保護法」という墮胎
容認政策を採択することになります。アメリカでは、ベビーブームは



(8/12)

1946年から64年まで続き、バトナム反戦運動やヒッピー文化など、政治・社会・文化面での活況の基盤となっていました。フランスの「1968年五月革命」は学生と労働者の闘いが結合し、地域へと広がっていました。ドイツでは、戦後体制への異議申し立ての運動が学生たちにより押し付けられました。これらの運動は、革命後の社会を準備するこゝろでできなかったことから、ドゴールの「混乱か秩序か」という同喝の下で強行された総選挙に對抗できず、ドイツでも財界要人暗殺にまで至り過激化の末に社民党政権により終息しました。日本では中大全中衛の活動家たちからキャンパスから三多摩地区へと活動拠点を移し、反党派の**叛旗派を68年に立ちあげたのです。67年には自主解散**としたりしました。**専従制度を拒否した組織性**、という試みは、各人の生活については、自己責任となり、主たる活動家には生計を連れ合の女性に依拠する「専食主義者」となる例が出ていたようです。その叛旗派に対し、内ゲバを続けたブント戦旗派はレーニン主義による中央集権型の党を目指していたのです。ブント系諸派に対する内ゲバで勝利を続け、一時は戦旗派ではなく、「ブント」を名乗るほどになっていたので、土田邸爆弾闘争等への内部告発が出されたことには口をぬぐっていました。政治党派から社会運動

(9/12)

団体へと転換し、場向く。荒一強体制下での組織財産
の私物化が問題となる中、無残な結末となりきた。

戦旗派と叛旗派、党派と全共闘との相克は、歴史的には
第一インターにおけるマルクスとバクーニン、ロシア革命時のボルシェヴィキ
とメンシェヴィキ、第三インターとグラムシ、コミンフォルムとユーゴのネー。
日本では講座派と労農派と似た先例があり、ゾルヴィン(当為。
べき論)とザイン(実在・現実)との相克が、今はおくり返されて
いるということなのかもしれません。

「政治革命か、社会革命か、
ではたう方向への探索としては 第二次大戦中にイタリアの獄
中でグラムシが執筆した「獄中ノート」にまとめられた構想
が一つの展望を示しています。彼は「国家 = 政治社会 + 市民
社会」として、機動戦に替わる陣地戦による「抵抗
ハゲネー」を、アソエ-ジョンを基盤に構築していくことで、
市民社会が政治社会を包摂していく方向を展望してい
た。このような構想は、近年、ヨーロッパで発展しつつある

「ミュニシパリズム(地域自治主義)の国際的ネットワーク」が、その
実現例といえるかもしれません。ミュニシパリズムについては、
斎藤幸平著、・人新世の「資本論」と・ゼロからの「資論論」、
で紹介されています。日本では、ミュニシパリズムの研究者である
岸本聡子さんが市民選挙を基盤として、杉並区長に当選
しています。数年前には、国会議員から世田谷区長に転じた

☆

(10/12)

保険展入と住民参加型の区政を進め始めました。そのような動きは、更に、住民主体型へと発展していくことか。日本における社会革命の一端となり得ます。

からって柳谷行人さんと浅田彰さんたちが始めた NAM (=ニューアソシエーション運動) は

当初は多くの運動体が結集したにもかかわらず、二年ほどで頓座しました。理念で結集しても、どう運営するのかの現実味が欠けていたことによるようです。叛旗派にしても、目指したコミュニティ運動の物質基盤をどうするのか、その具体策を持てていなかったことか。「政治課題が無くなった」ということでの解散に至ったものと思われず。これらの前例を踏まえて、

それからこの数年、モデルケースの一つとして注目しているのは、関西よつ葉連絡会の活動です。

関西連団体は「人民新聞」と「地域アソシエーション」を発行している他に、よつ葉農産・能勢農場・山羊農園・大阪地域での産地直送センター、よつ葉ファミリー川西北摂高槻共同組合、北大阪合同労組などの活動を継続しています。これらの活動の原初となる事業を始めたのは共産党除名・脱盟世代の方々でした。関西で始めた牛乳販売事業が成功し、地域へと拡大したことから、それを原資として能勢農場を開き、周辺の農家の方々とのつながり、連携を強め、農産物の産直事業へと発展させる一方「新左翼」紙(現「人民新聞」)を発刊し、新左翼世代との結合も果たしたので、



(11/12)

流通部門から生産部門。そして情報発信と研究会活動等を通じて社会運動領域へと活動を発展させ続けています。

創業者の一人である上田等さんは個人的に新左翼組織への支援活動を担っていたのです。晩年に出した「自己史総括」の冊子の中で、「日本赤軍」にしても「よど号グループ」にしても、日本国内への回帰を目指しているように。なぜ、自分たちがいる現地に根をおろそうとしないのか」との苦言を述べていました。自分たちがいる場所・地域に根をおろすためには、社会基盤づくりにつながる経済事業をも展開する必要があるとあります。そのような活動形態は党派から生じた専従制度と似た弊害をも解消させることができると。若い世代の受け皿となることもできます。今やネットの時代で、各地域、各分野の活動主体がメール、LINE、ZOOM、X、スウェーデン等を駆使しての活動が可能になっていきました。クラウドファンディングという原資のつくり方でありました。

党派や全共闘運動の活動家であった方は、今や、かつての1年、運動の経験、教訓を次世代に伝える最後の時期、機会を迎えています。

そこで大切なのは、文章に残すだけではなく、オーラルヒストリーの語り手、言語部（カセット）となることです。

そのような試みは「連合赤軍の全体像を記録する会」の方々が当事者との面談のテープ起しを冊子としたシリーズとして実現してきました。また、「慶応大学学生運動史 1968年米軍資金導入 1969年大学立法をめぐって」とのタイトルでA4判320頁からなる

12/12

レポートが 都倉武之研究会(都倉ゼミ)の成員によって、2019年の三田祭の折り発表されています。現役の学生たちが68年~69年の闘争の当事者や関係者40名もの方々への面談、インタビューを重ね、テマ起ししたものが基軸となっています。前述の「全共同個人史プロジェクト」も含め、旧・現 活動家の方々の口述証言は当時の運動の実像を生々生々伝えるオラル・ヒストリーとなります。敵を利用すること、味方が不利になることは墓場まで持って行くということも口實に、自分たちにとって不都合な臭いことにはフタを踏むということでは 経験・教訓を次世代に伝えること、社会人の広がりを得ることも出来ます。「新左翼ムラ」のまま旧世代として死滅・消滅してしまふこととなります。私は獄中において、機会も手段も限られています。これまでに「近況報告」で提起してきた、日本赤軍・新左翼党派・全共同運動の総括を更に深め、私自身が担って来た活動・闘いのとらえ返しを、なんらかの形で、発表して行きたいと思っています。それが私の終活・ライフワークとなります。

和光 晴生

P.2 2頁目の獄中者についての記述への追加です。宮城刑に服役中の金兼田さんは元星ムラで、1980年3月に逮捕され、獄中43年となります。泉水博さんは1977年、日本赤軍の日航機ハイジャック事件の折、釈放され、1988年にブリコンから送還された後、岐阜刑に服役中に亡くなりました。享年83歳。以上で完了です。よろしく!